

状核 $0.0092 \pm 0.0017/\text{min}$, 被殻 0.0090 ± 0.0012 , 中脳 0.0038 ± 0.0010 , 海馬 0.0023 ± 0.0007 , 扁桃体 0.0031 ± 0.0015 , 中前頭回 0.0026 ± 0.0007 . [結論] MRI を用いた FDOPA Ki map の解剖学的標準化により全脳での自動的 ROI 解析, 画像ベースの統計解析が可能である.

5. マンガン曝露患者の FDOPA-PET および MRI 所見

伊藤 健吾	永野 敦子	加藤 隆司
旗野健太郎	新畑 豊	中村 昭範
川角 保広	(長寿研・生体機能)	
辻 明	下春 和彦(国療中部病院・放)	
加知 輝彦	阿部 祐士 (同・神内)	
久永 直見	(産業医学総合研)	
Yangho Kim	(Industrial Health Research Inst.)	
Joon-Youn Kim	(Dong-A Univ.)	

症例は Mn 曝露歴が明らかでパーキンソニズムを呈した男性 2 例である。 ^{18}F -dopa (FDOPA)-PET および MRI を施行した。MRI は検査時点でいずれも異常がなかった。PET は 1 例ではこれまでの報告と同様に異常を認めなかったが、残りの 1 例では被殻での FDOPA の集積低下が示された。本症例では特発性パーキンソン病の発症が疑われるが、Mn 曝露との関連も否定できず、経過観察が必要な稀な症例と考えられた。

6. ^{125}I -iomazenil による免疫抑制剤 FK506 のラット脳虚血性神経細胞障害抑制作用の評価

外山 宏	古賀 佑彦	(藤田保衛大・放)
松村 要	竹田 寛	(三重大・放)

NO 合成酵素阻害剤である FK506 の虚血後の神経細胞障害抑制作用の評価における中枢性ベンゾジアゼピン受容体 (BZR) 製剤の有用性について、ラットの一側中大脳動脈閉塞モデルを作成し評価した。梗塞の辺縁部において FK506 投与群は、非投与群に比べて BZR の低下が有意に軽度であった。梗塞の中心部では、BZR の低下が相対的に軽度であったが、有意ではなかった。1 週間後と比べ 3 週間後に、梗塞の辺縁部で FK506 非投与群は BZR の有意な低下を認め

たが、投与群は BZR の有意な低下を認めなかった。梗塞の中心部、遠隔部では、投与群、非投与群に有意な差を認めなかった。中枢性 BZR 製剤は、FK506 による梗塞の辺縁部 (ischemic penumbra) における神経細胞障害抑制作用の指標として有用と考えられた。

7. MRI, SPECT にて経過観察された亜急性期脳梗塞の 3 例

水野 晋二	加藤淳一郎	梶浦 雄一
後藤 裕夫	星 博昭	(岐阜大・放)
坂口 平馬	高橋 幸利	近藤 直実
		(同・小児)
安田 顕	橋本 和明	西垣 和彦
		(同・二内)
奥村 歩	三輪 和弘	川口 雅裕
坂井 昇		(同・脳外)

脳梗塞の亜急性期に MRI と $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -HMPAO SPECT を施行し、経過を観察できた症例を 3 例経験したので報告した。症例 1, 2 は若年者であり外傷および片頭痛が梗塞の原因となった稀な症例と考えられた。症例 3 は塞栓性梗塞であった。3 症例とも亜急性期と考えられた時期に、 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -HMPAO SPECT で高集積を認め、高集積の部位は MRI の T1, T2WI で fogging effect がみられ、強い造影効果を認めた。 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -HMPAO の亜急性期脳梗塞の病変部集積は著明であり、hyperfixation の機序により集積している可能性がある。

8. 解離性障害の ^{123}I -IMP 脳血流 SPECT

鈴木 陽	尾崎 紀夫	西岡 和郎
池田 淑夫	伊藤 哲彦	笠原 嘉
		(藤田保衛大・精神)
外山 宏	菊川 薫	古賀 佑彦
		(同・放)
西村 哲浩	加藤 正基	(同・放部)

解離性障害の病態を明らかにするため、DSM-IV の診断基準により、解離性障害と診断された患者 5 名 (女性, 平均年齢 21.6 歳) に ^{123}I -IMP を用いた脳血流 SPECT を施行し、対照 5 名 (男性, 平均年齢 25.0 歳) と比較した。視覚的評価として、脳幹部、小脳半